

駿河敬次郎医師とキリスト教

関 智 征

1. はじめに

本稿は、駿河敬次郎医師(1920年-)の生涯について、キリスト者としての側面に焦点をあてるものである。駿河敬次郎は、日本における小児外科医師の草分け的な存在として小児外科医療分野を切り拓いてきた医師である。その医学的な貢献に関しては、既存の文献で公表されている。一方で、駿河敬次郎のキリスト教信仰の側面については公に著されたものが、ほとんど存在しない。そこで、本稿は駿河敬次郎医師の102年の人生を概観しつつ、そのキリスト者という側面に光をあてることで、駿河医師の社会への貢献とキリスト教信仰のかかわりを考察する。

2. 金沢時代

駿河敬次郎は1920年7月28日、石川県金沢市で生まれた。父、祖父も医師という家系だった。産婦人科である父親は、人力車に乗り、深夜も休日もなく産気づいた妊婦の家のもとに仕事で向かっていた。駿河医師は幼少期に父親の仕事の大変さを見て「自分は医師にだけはなりたくない」と思っていた。

当時は金沢市の中心部も自然が豊かであった。駿河医師の生家の近くにも樹木が多く、草茫々になる原っぱがいくつもあった。幼少期から生物の体の機能に興味のあった駿河敬次郎は、夏にはセミが幼虫から成虫になるのを何度も観察していた¹。

駿河医師は父母がクリスチャンであった。生家の前にあった金沢殿町教会に小さい時から通っていた。毎週、一銭の献金をもって日曜学校に参加した。駿河医師の幼少期は、キリスト教が耶蘇と呼ばれていた。世間のキリスト教への風当たりも強かった。投石を防ぐため、教会の窓ガラスには金網がつけられていた。駿河敬次郎医師は、幼少期の教会学校の思い出として、ダビデとゴリアトの物語、クリスマス・キャロルのスクルージおじさん物語、美しかった花の日礼拝、楽しかったクリスマス礼拝を挙げている²。

教会学校の先生は、金沢医科大学や第四高等学校の学生などが担当していた。教会の明るい温厚な雰囲気印象的だった、と駿河医師本人が述懐している³。

また駿河医師の母親・東洋女(とよめ)は、米国宣教師トマス・ウィーンにより創設されたキリスト教主義学校の北陸女学院を卒業していた。東洋女は、人にプレゼントやご馳走をするのが好きな人だっ

1 駿河敬次郎『小児外科医の歴史と共に』、順天堂大学医学部小児外科学教室、40頁。

2 駿河敬次郎「交わりの会便り」127号、東京池袋教会、2012年、7頁。

3 駿河敬次郎『ふるさとと私』小児外科 Vol.47、2015年、93頁。

た。駿河医師は母親から「いろいろ人にして差し上げることが一番いいんだ」と教えられた。この母親の教えが小児外科を選ぶ潜在的なきっかけになった、と駿河医師は語っている⁴。

旧制・第四高等学校入学後も、駿河医師は「四高YMCA」に所属し、家庭集会などで聖書を学んだ。そして四高在学中に島田四郎牧師より洗礼を受け、キリスト者となった。もともと高校時代は法学部志望であったが、四校YMCAで出会ったクリスチャン医師の影響もあり、駿河医師は医学部を受験することを決めた。

3. 上京して医師となる

1941年に東京帝国大学に入学した駿河医師は、上京し東大YMCA寮に住み始めた。東京での新生活にカルチャーショックを受けたが、寮の友人に東京生活を軌道に乗せるのを助けてもらい少しずつ大都会の生活にも馴染んでいった。駿河敬次郎医師は、寮の聖書研究会や日曜学校の教師を経験する中で、信仰が育まれていった、という⁵。戦時下で食糧事情は悪くなっていく中であつたが、東大YMCA寮の自由な雰囲気の中で友人と様々な議論をした。

1944年に医学部卒業後は陸軍短期軍医となり金沢第九師団に配属された。駿河医師を含め第九師団から医師9人が外地の戦場に派遣される予定になっていた。しかし駿河医師がインフルエンザにかかっている間に他の軍医8人は外地に移動した。一方、戦況が悪化し駿河医師は内地勤務になり、軍医仲間9人のうちただ一人生き残った。

軍隊の現場では外傷、ひょう疽、皮膚疾患、栄養失調など、あらゆる疾患を治療しなければならなかつた。大学を卒業したばかりで臨床経験が何もない中、先輩医師から教わりながら必死に実務を覚えた。千葉・九十九里浜で本土防衛の任に就いている時に終戦を迎える。

終戦後、軍隊から東京大学に戻るにあたり、駿河医師は内科を志望した。しかし、戦地から復員した先輩医師たちにより内科がいっぱいとなったため、東大医学部の第二外科に入局した。

この間も、東大YMCA寮の客間に住み、木下順二（劇作家）、森有正（哲学者）、大塚久雄（経済学者）などのキリスト者と共同生活の中で交流を深めた。

4. 小児外科という天職に導かれて

駿河敬次郎医師は、1948年より賛育会病院の外科部長となる。外科といっても当時は専門が細分化されていたわけではなく一般外科、消化器外科、整形外科、泌尿器科、皮膚科、時には脳神経外科に属する疾患まで診療していた。

この賛育会病院への赴任が期せずして「小児外科」という分野を切り開くきっかけとなった。賛育会病院は東大YMCAのOBである吉野作造らによって現在の墨田区太平に作られた病院である。元々お産

4 駿河敬次郎「小児外科を語る」日本小児外科学会雑誌、第24巻3号、1988年、778頁。

5 駿河敬次郎「交わりの会便り」127号、東京池袋教会、2012年、8頁。

のための病院であったため、治療を必要とするたくさんの赤ちゃんがいたのだ。

駿河敬次郎医師が着任したころの賛育会病院は戦災で丸焼けになった建物を使っており、手術室も粗末な木製のドアとベニヤ板で仕切りがされていただけであった。周囲には空襲による焼け跡が生々しく残っていた。当時は物資が不足している時代で、今のような精巧な手術道具もなく、まして体の極めて小さな新生児用に特化した医療器具も皆無だった。

しかし、リソースが足りない中でも知恵をしばり工夫をこらして治療にあたった。大人の手術で使う針と糸では新生児のうすい腸を満身に縫うことができなかつたので、試行錯誤の末、心臓外科手術で使う糸で赤ちゃんの手術をした。インキュベーターも木製のものを手作りし、電球をつけたり消したりして温度調整をした。

新生児外科を始めるといっても、国内で新生児外科をやっている医師は一人もいなく、小児外科に関する情報もない状態だった。駿河医師は日比谷の進駐軍が作った図書館であるアメリカ文化センターで暗中模索しながら文献を探した。戦時中の日本国の医療進展の空白を埋めて海外の新しい知識を導入しようとしていた。

当時の社会では全く治療もされず見捨てられた赤ちゃんがたくさんいた。口唇口蓋裂（当時は「みつくち」と呼ばれていた）、先天性食道閉鎖症、鎖肛などの乳幼児が親からも見放されてしまっていたのだ。臍帯ヘルニアなどの疾患をもって生まれた赤ちゃんが放置されているのをみた。「先天異常（当時の言葉では「奇形）」がある子供を捨ててください」という両親もいた。駿河敬次郎医師はそのような症状の子供の手術を手掛けていった。

1953年には、日本で最初の先天性腸閉鎖の手術成功例を賛育会病院で得ることができた⁶。駿河敬次郎医師による手術成功例が出たことで、徐々に日本各地で新生児外科手術が行われるようになっていった。

戦後すぐは栄養失調も多かった。「助からない先天性疾患をもった新生児は死んでもかまわない」という風潮が医師にすらあった。学会でも新生児、乳幼児の治療への関心が薄かった。実際、駿河敬次郎医師は当時の外科の指導者の一人に「そのような先天異常をもった子供を手術して救命するのは無駄だ」と言われた。駿河敬次郎医師が1956年に日本外科学会で初めて新生児手術成功例について発表した時は、発表順が最後だったこともあり皆帰ってほとんど人がいない状態だった⁷。

5. サリドマイドと胆道閉鎖

駿河敬次郎医師は、海外から小児外科医師を招き、日本各地を周り小児外科の重要性を説いてまわった。医療関係者や一般への地道な啓蒙活動を続ける中で、少しずつ小児外科の必要性が認知されてきた。

1963年、サリドマイドが世間を騒がせる中、駿河医師はフィンランドのスマラー博士と共に日本で初めてサリドマイド患児の手術を行った。手術の様子は新聞、テレビなどでも報道され、小児外科の確立

6 駿河敬次郎『賛育会創立90周年を迎えて』社会福祉法人賛育会、2008年、22頁。

7 村上朝子「新生医療の草分け・駿河敬次郎医師は98歳でいまでも現役～」『週刊金曜日』1235号、2019年、37頁。

と専門病院の必要性が世間にも認知された。これは小児外科学会を作る機運にもなった。この時手術した荒井貴氏とは術後も成長の折々に診察や交流を続けた。駿河医師は小児外科の魅力として、手術した患者さんが60年、70年生きるのだと話す⁸。

1966年に、順天堂大学医学部に移り小児外科開設に奮闘した。そして、先天性胆道閉鎖症の乳幼児の手術方式を確立した⁹。これはMiracle of Juntendoとも報道され、世界中から駿河医師の手術を求めて患者が来日した。

6. ザンビアなどへの貢献

駿河医師は順天堂大学を退官後も、八重洲センタークリニックで診察を続けた。それは92歳まで続いた。かつて手術を施した患者が歳を重ね健康上の問題を抱えて駿河医師の診察を求めて病院に来た。歳を重ね手術はできなくなったものの、触診を丁寧に行う内科の診察は変わらず患者たちから信頼が厚かった。長い年月で培ってきた各専門医とのつながりを生かして、医療相談を受け必要に応じて相応しい医師を紹介したり援助する働きを続けた。

駿河敬次郎医師は、世界各国への医療援助にも積極的に乗り出す。特に、ザンビア医療援助を日本政府の依頼もあり力を入れた。駿河医師が初めてザンビアを訪れた1977年当時、ザンビアの新生児死亡率は70%近くだった。東京オリンピックの年の1964年に独立したザンビアは、医師たちがイギリスなど国外に立ち去ったため、医師が極度に不足していた。そこで医療支援のために駿河医師は何度も同国を訪問した。それは、1981年の東アフリカで初めての子供病院としての「ザンビア大学附属病院（新生児外科、未熟児医療センター）」の完成に尽力した。その後も駿河敬次郎医師は毎年ザンビアから医師、看護師、医療スタッフを日本での研修のために受け入れ、ザンビア医療援助の種まきを20年以上も続けてきた。

駿河敬次郎医師は自己の仕事への姿勢として「私の関係しております医療と福祉の領域で（中略）短い先のことではなくして50年後、100年後というような私共の次の時代のことを考えて仕事をする場合に私共は我々の人間の思いを超えた大きなそして意義のある仕事ができると考えております」と述べている¹⁰。このような大局的な視野を持ちながら、戦後の逆境からスタートし、周りの人と協力をしながら道なき場に道を作ってきた。

8 村上朝子、同上、39頁。

9 胆道閉鎖症とは肝臓と十二指腸との間にある胆道が何らかの原因で閉塞している難病である。肝臓で作られた胆汁の出口がないため肝硬変になり死につながる病気である。なお駿河敬次郎医師は「胆道閉鎖症の子供を守る会」を患者家族や関係者と共に作る。これは後に、母子手帳に乳児の便の色をチェックする項目が入るきっかけにもなる。

10 駿河敬次郎『小児外科医の歴史と共に』、順天堂大学医学部小児外科学教室、9頁。

7. 駿河敬次郎医師とキリスト教

駿河敬次郎医師の仕事とキリスト教の影響は、どのようなものがあつたか。この点、駿河医師の小児外科としての姿勢について筑波大学副学長（当時）の沢口重徳は「病める赤ちゃんへの愛、不幸な病気の子供への愛、ただ単に日本のみならず国境を超えて広く全世界の子供への限りない愛を切々と感ずるものであります」と記している¹¹。この駿河敬次郎医師の「地上で最も弱い未熟児、新生児を助ける」ことへの情熱の根底に、幼いころから聞いていた「小さな者、弱い者を助けよう」「困っている人に何かをして差し上げなさい」という母親の教えがあつた。

また、駿河医師は小さな時に聞いて印象に残っていることばとして「わたしの兄弟である この最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである」（新約聖書マタイによる福音書25:40）という箇所を挙げ、自身の小児外科医になる重要な動機の一つになった、と述べている¹²。

8. 生涯現役を目指して

駿河医師の人生観に影響を与えた二人の人物がいる。

一人は金沢のアメリカ人宣教師トマス・ウィーンである。駿河医師が10歳の時に、金沢で一つの出来事があつた。1931年2月8日、トマス・ウィーンが日曜日の礼拝中に教会の中で亡くなったのだ。ウィーン宣教師は、この日、金沢日本キリスト教会の礼拝説教者として教会の最前列のベンチに座り、教会の人々と一緒に賛美歌を歌い聖書朗読を聞いていた。開会の祈りの途中、大きな息のような声を出し、ウィーン宣教師は教会の礼拝堂で倒れ、その場で脈拍・息が途絶えた¹³。

駿河医師はその亡くなった現場にはいなかったものの、トマス・ウィーン宣教師が心血を注いで働いた教会という現場で、礼拝の最中に亡くなったことはショッキングな出来事として記憶している。トマス・ウィーンは、駿河医師が通っていた金沢殿町教会を宣教師ジェームズ・ポーターなどと共に作った人なので駿河医師と同じ街に住む身近な存在だった。トマス宣教師の最期は「亡くなる直前まで、自分が情熱を注いできた医療の仕事に打ち込みたい」という駿河医師の死生観を形作る原体験となった。

もう一人、駿河敬次郎の人生観に影響を与えたのが、本間日臣医師である。本間医師は1916年生まれで、東京帝国大学医学部卒業後、海軍短期軍医となった人物だ。テニヤンの航空隊基地に勤務し、やがて玉砕に至る中で九死に一生を得る経験をした¹⁴。

テニヤン島で戦友の大半が亡くなった中、生と死の極限をくぐり抜けた本間医師は「生と死については、我々の意思ではどうにもなりません。死ぬまでは、与えられた使命を全うするため充実した生命を燃焼しつくさねばならないと思っています。生かされている限りは生きつくさねばならないと年をとっ

11 駿河敬次郎『小児外科医の歴史と共に』25頁。

12 駿河敬次郎「交わりの会便り」127号、東京池袋教会、2012年、8頁。

13 中沢正七『日本の使徒 トマス・ウイン伝』金沢教会長老会、2005年、158-160頁。

14 本間日臣『若い医学徒への伝言』PDN、2001年、59-82頁。なお、芥川賞作家で独自の作風で知られる中山義秀の唯一の戦記物『テニヤンの末日』（新潮文庫、1969年）は、同島で戦死した本間医師のクラスメイト大島軍医についての本間医師による追悼手記を元に書かれた作品である。

て強く感じます」と述べる¹⁵。

その本間医師は2002年、虎ノ門病院外来で最後の患者の診察が終わった後に、突然診察室で亡くなっている。本間医師は、旧制一高時代をふりかえり、矢内原忠雄の「汗と祈りにみちた人生」や南原繁の「仕事のさなかに倒れること（ヒルティ）がこの上なく望ましい」ということばも座右の銘の文章の中で挙げていた¹⁶。自身の望んでいた最期を迎えることができたわけだ。

同じクリスチャン医師として、また順天堂大学の同僚として駿河医師は本間医師を尊敬しており「医師として本間先生が羨ましい」と述べている¹⁷。共に軍医仲間やクラスメイト、多くの同世代を戦争で失った者として、共感するものがあったのであろう。

実際、駿河医師は93歳で東京駒込にノアクリニックを開設し、102歳の今も体力が衰える中できる範囲での医療相談を続けている¹⁸。

9. おわりに

以上、駿河敬次郎医師の人生をキリスト者としての側面に注目して見てきた。駿河医師はいくつもの出会いが重なったことで、駿河医師本人の当初の計画とは違う「小児外科医師」としての働きに導かれていった。そして、79年の医師生活の中で、与えられた使命を全うすべく駿河敬次郎医師は目の前の患者、特に未熟児や新生児に寄り添ってきた。その背景には、母親をはじめ幼少期から教えられた「小さい弱い立場の人を助きたい」という想いがあった。

また、トマス・ウィーン宣教師、本間日臣医師など先輩キリスト者との出会いの中で「可能な限りは働き続け誰かの役に立ちたい」という人生観も作られてきた。そして駿河医師の生き様、特に病気で苦しんでいる人に寄り添う姿勢の通奏低音としてキリスト教の隣人愛が流れていると言えよう。

10. 参考文献など

- ・関智征「駿河敬次郎ドキュメンタリー映像企画」2021年、https://note.com/seki_tomoyuki
- ・駿河敬次郎『小児外科』中公新書、1967年。
- ・駿河敬次郎「小児外科開拓の歩み」別冊東京青年、343号、1998年。
- ・駿河敬次郎『ふるさとと私』小児外科Vol.47、2015年。
- ・駿河敬次郎『小児外科の歴史と21世紀への展望に関して』日本小児外科会誌 第37巻2号、2001年。
- ・駿河敬次郎『賛育会創立90周年を迎えて』社会福祉法人賛育会、2008年。

15 本間日臣『若い医学徒への伝言』93頁。

16 本間日臣『若い医学徒への伝言』46頁。

17 関智征「駿河敬次郎ドキュメンタリー映像企画」https://note.com/seki_tomoyuki/、2023年1月6日閲覧。

18 2023年1月6日確認。102歳の現在も、足腰などが衰える中、頭はクリアで文字は書けるため、紹介状を書くなどできる範囲で医療行為を続けている。なお、筆者自身も大病をして、駿河敬次郎医師が99歳の時に助けられた。その時の記録については「大丈夫。治ります」と私を救った100歳現役医師のドキュメンタリーを参照。<https://camp-fire.jp/projects/view/511637>

- ・順天堂大学医学部小児外科学教室『小児外科の歴史と共に一駿河敬次郎名誉教授古希記念誌』、1990年。
- ・齊藤實『賛育会の100年』社会福祉法人賛育会、2018年。
- ・本間日臣『若い医学徒への伝言』PDN、2001年。
- ・村上朝子「新生医療の草分け・駿河敬次郎医師は98歳でいまでも現役～」『週刊金曜日』1235号、2019年。
- ・中沢正七『日本の使徒 トマス・ウイン伝』金沢教会長老会、2005年。
- ・東京池袋教会「交わりの会便り」127号、東京池袋教会、2012年。

(せき・ともゆき)

フェリス女学院大学 非常勤講師